

胃 集 団 検 診 （ 職 域 ）

動 向

平成19年度の職域における胃間接X線撮影検査の受診者数は、55,012名（対前年比111.5%）であった。昨年度より5,670名増加した。

今年度より、検査の待ち時間の緩和を目的とした午後検診を施行した。検査条件として、朝食は7時までにおとりいただくこと（検査まで6時間以上空ける）とした。なお、職員によるテストなど医学的検証の結果、診断能に問題がないことを確認の上、導入した。今後は、顧客ニーズに合わせて順次拡大していく。

また、検査時の発泡剤を少量の水での服用を、今年度より少量バリウムで服用するように変更した。その結果、発泡時間がゆっくりとなり、ゲップが出にくくなり、受診者の苦痛緩和と安全性の向上が図れた。

これからも受診者の安全性を確保し、最新の装置による高精度な検診サービスの提供に努めていきたい。

方 法

午後に胃部検査を実施することについては、以前からの懸案事項であったが、現像作業を伴うアナログ装置では、成績納期に影響をきたす恐れがあった。平成19年度に2台のデジタル胃部撮影装置が更新され、全体の約9割がデジタル化した。そのため平成19年度より、一部の職域検診にて午後検診を導入した。午後の受診者に対しては午前とは別の注意事項を記した用紙を事前配布した。内容として受診6時間前までの軽食摂取及び3時間前までの飲水が可能であることを明記した。また、午後遅い時間までの絶食による苦痛を配慮し、受付時間を15:00までとした。巡回検診については、昼休み時間の規定など事業所ごとの労働条件を考慮した。

また、バリウム造影剤が高濃度少量に移行した結果、従来の胃部検査に伴う苦痛や危険性緩和対策の主体が、発泡剤によるゲップの我慢や低血糖状態の回避などへ移行した。そのため、発泡剤投与方法を水からバリウムへ変更し、従来の約2倍以上の時間

を掛けた緩やかな腹圧変化を実現した。

結 果

平成19年度より胃部午後検診を導入した結果、午後の実績としては施設検診にて563名、巡回検診にて2事業所18名であった。また、その全ての画像について調査した結果、食物残渣などは認められなかった。今後は地域検診も含め、受診者のニーズに応じた検診システムとして確立していく方針である。

また、バリウムによる発泡剤飲用へ移行すると同時に実施した受診者へのアンケート調査の結果、約8割から「楽になった」との回答を得ることができ、それらの結果について平成19年9月の消化器がん検診学会にて報告を行った。また、発泡時間の増大に伴う胃内空気量の不足や泡の発生に対する対策として、バリウムの飲用を一定の間隔を設けた2段階方式とした。さらに介助者による投与時説明内容の工夫や投与タイミングを調整し、安定した造影条件についての検討を行った結果、検査途中での発泡剤追加投与件数が著しく減少した。

次年度以降は、上記学会推奨である胃部X線標準撮影法への移行および、デジタル装置のネットワーク化を推進していく方針である。

関係の集計表は76頁に掲載